

序論) 再会の希望と体のよみがえり

キリスト者の葬儀には、悲しみの中にも不思議な「平安」があります。それは、故人が今、主の御手にあるという確信と、やがて来る主の日に「再会できる」という希望があるからです。この希望の根拠は、聖書が約束する「体のよみがえり」にあります。

しかし、コリント教会の中には、当時のギリシヤ的な価値観（肉体は魂の牢獄であり、死による解放こそが救いであるという考え）の影響を受け、「キリストの復活は信じるが、死者の（体の）復活はない」と主張する人々がいました。パウロは彼らに対し、体の復活がいかに信仰の土台であるかを説き明かします。

1. もし死者の復活がなかったら (12-19 節)

パウロは、もし死者の復活がないとするならば、私たちの信仰は根本から崩れ去ると警告します。

① 宣教と信仰が空しくなる

キリストの復活は、私たちの復活の先駆けです。もし人がよみがえらないなら、キリストもよみがえっていないことになります。そうなれば、使徒たちの証言は嘘となり、福音宣教は無意味なものとなります。

② 罪の解決がなされていない

死は罪の結果です。もしキリストがよみがえっていないなら、死の力は残ったままであり、私たちは罪の中に留まっていることになります。

③ 最もあわれな存在になる

復活の希望が嘘であり、この地上の人生だけで終わるなら、迫害や苦難の中で信仰を守っているキリスト者は、世界で一番あわれな者となってしまいます。

2. キリストのよみがえりの意味 (20-28 節)

しかし、事実はそうではありません。キリストは「眠った者の初穂」として、死者の中からよみがえられました。

① 初穂としての保証

初穂（最初の収穫）は、それに続く豊かな収穫の保証です。キリストの復活は、それに続く私たちの復活を保証する歴史的事実です。アダムによって全人類に死が入ったように、キリストによってすべての人が生かされるのです。

② 最後の敵「死」の滅び

復活には順序があります。まず初穂であるキリスト、次に主の来臨の時に私たち信徒がよみがえります。そしてキリストは、あらゆる敵対する力を滅ぼし、最後に「死」そのものを滅ぼされます。

③ 神がすべてにおいてすべてとなる

死を滅ぼし、無効化したあと、キリストは神の国を父なる神様に渡されます。

キリストがその国を父なる神に渡される時、神のご支配が完全に満ちる「神の国」が完成します。そこでは、私たちは栄光の体をいただき、永遠に神と共に生きるのです。

結論）揺るがない希望

私たちの信仰は、単なる気休めや精神論ではありません。キリストがよみがえられたという事実は、私たちもまた、体を伴ってよみがえることの確かな保証です。

この「復活の信仰」があるからこそ、私たちは死の悲しみに飲み込まれることなく、「また会える」という再会の希望を持って生きることができます。この希望を強く握りしめ、主にある歩みを続けてまいりましょう。